

図10

「三方よし」で視野が広がる



どんなよいことでも、視野が狭いと周囲に不快を与えることもあります。自分と相手の二方だけでなく、自分と相手と周囲（社会）のことを考えることで「三方よし」が実現します。

に立ち位置を定めることが有効です。母親も、周りの人も、自分も見られるのです。道徳の共同体を末広がり発展させるには、支え合いが欠かせません。第三者を視野に入れた支え合いの精神、つまり「公共の精神」に立つことで、社会の持続的な発展につながります。それによって、目の前の相手にもよりよい結果をもたらすことができます。

また、「三方よし」で忘れがちなのは、自分を見つめ、自身を生かす視点です。モラロジーは、視野を広げるきっかけを自然や先人の恩恵、社会に対する感謝や報恩の念に求めています。こうしたつながりの中で自分の存在意義を感じ取ると、活動のエネルギーが湧いてきて、大局的な視野に立つ広く伸びやかな実践を重ねることが出来ます。この実践力は、道徳実行の動機と目的と方法を意識に置きながら生活を続ける中で培われます。

モラロジーでは、「三方よし」を意識できる人（「三方よし」名人）が社会が増えていくことで、誰もが安心して暮らせる社会が実現すると考えています。

今月の範囲

第一部 基礎編
第三章 道徳共同体をつくる
二、人類の共生と公共精神

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は「公共の精神」を発揮する上で大切な「三方よし」の考え方を図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

「三方よし」で視野が広がる

—— よりよい社会の実現のために

きのしたじょうこう
教育研究室研究助手 木下城康

よいことをしようとして、周りが見えなくなってしまうことはありませんか。電車内でこんな親子がいました。

「お母さん、ここ、ここ」
周囲を押しつけて駆け込んだきた男の子が母親に声をかけています。大好きなお母さんに座ってもらおうと考えていたようです。お年寄りや、妊婦さんがいることに気づいた母親は、子供の気持ちがいられない反面、困り顔です。

図10は、男の子の視界に母親しか映っていない様子を表しています。このように、自分と相手だけを考える行為は、あまり考えなくても実践できます。

ところが、社会（第三者）に対する配慮を欠いた道徳では、よい結果を長く得られるようにはなりません。目の前の相手だけを大切にすると道徳ではいざれ立ちゆかなくなるのです。

「三方よし」は、自分と相手という直接の当事者が便益を得るだけではなく、周囲の人々や社会にとっても、よい結果が得られることをめざす考え方です。その実現には、第三者も自分も視界に入るよう